雲

詩劇「みいけの闘い」を観て

九州炭労書記　宮田利明

〝みいけの闘い〟の一場面

さる五月九日、春闘共闘主催による大牟田大集会に参加し、構成詩劇「みいけの闘い」を観る機会をえた。

私はいまここに劇評を書くつもりはない。専門的な立場からすれば、数々の批評はあるに違いない。それは音楽にも、劇にも、まったくの素人のわれわれが目につく程のことではないにしても、合唱における技術的な若干の不調和朗読における生硬さ、そして寸劇にみる個々の台詞まわしの素人ぽさは、構成詩劇「みいけの闘い」が、仂く三池炭鉱の若者たちによって素材が生みだされ、作詩され作曲され、幾度かの稽古の中でのダメの積み重ねによってでき上がった構成詩劇であることを知ったとき、専門的な劇評以前の問題であると知らされるからである。（私自身、そのような専門的劇評ができるとは考えてもいないが）

そこに、仂く炭鉱労仂者の力強い息吹きを、胸の鼓動を、じかに肌でうけとめ、春闘共闘に結集して大牟田市民会館を埋めた各単産各県評の代表者一人ひとりの胸にその受けとめ方に差違はあったにして、深い感動と、敵階級に対するたたかいのエネルギー源へと昇華されるならば、構成詩劇「みいけの闘い」の大方の目的は達せられたはずである。

するすると巻きあげられる緞張。舞台正面に、シルエットで浮きだされた炭鉱の男たちの「地底の歌」に劇ははじまる。

かって三池争議により流行を生んだホッパースタイルの若者たちの歌声は、過去を踏み越え、現実の苦しみに耐え、そして約束された未来のあることを信じてふりしぼる地底の歌。暁を象徴するバックに映えて、たくましく、果敢に振られる指揮者の腕が、コーラスを指揮するその手が、かけられた合理化と首切りをはね返してきた腕であり、差別と抑制の圧力を踏み越えてきた手であることが、全体のポイントとなって印象づけられる。

すべての日本の労仂者、農民、市民が「三池と安保」でたたかった一九五九年、ピケットのあい間にだされたかくし芸、そこには炭鉱労仂者のもつペーソスと笑いが舞台一杯にくり拡げられる。それも束の間、まがうことない現実として「久保清さんの死」が報じられた。

そして一九六三年十一月九日の三川鉱大爆発、あまりにも悲惨な人殺しが、巧妙な三井独占の保安サボによって行なわれた。

暗黒の坑内に白煙がはい、バタバタとくず折れ、倒れ、重なる幟灯。妻を呼び、子を、母を、父を同ほうを呼んだに違いない労仂者の血の叫びは、垂直に虚空をつかんだ手に表現された。

「こげんむごかこつが許されてよかつか」「父ちゃん、きつかったろうね。苦しかったろうね。この仇はきっととってやるぞ」

遺族は叫んだ。

ガスを吸った患者のものういまなこは、空虚に一点をみつめ、最愛の妻子の存在すら記憶になく、ちびてしまった煙草の火は、感覚を失った指先をこがす。

観終って私は、ぼうだとして流れる涙をどうしようもなかった。その涙は差別と合理化に耐えていく三池の労仂者に対する、同情の涙であっただろうか。否、私自身のみうちを流れる労仂者としての怒りと憎しみの涙であったはずである。

漂々として流れる雲は、気象という宿命に逆うことはできないものなのか。低くたれこめた暗雲はあかねにかわり、白雲となって拡がっていくことを、労仂者自身が一番知っているのではないだろうか。

追記

この稿を起す矢先に、九日、大牟田市民会館で、そのふしくれた掌を握り合い、爆発で息子を三井に奪われた丸山昇さんの悼に接した。爆発の責任を追及し、裁判所に、検察庁に抗議を続けられたあり日の丸山さんの面影が、いま彷沸として脳裏をよぎる。深く、深く哀悼の意を表します。

丸山さん、安らかに

私たちは闘いつづけます

遺族　中西文子

五月十六日早朝、宮前分会の地域役員の方から「中西さん」「中西さん！」と起され、びっくりして起きて見たら、丸山会長の亡くなられたことを知らされました。あまりの突然さにガク然とし、身体がふるえて、しばらく呆然として、なすすべを知りませんでした。

でも、とにかくこれは大変なことだ、落着かなければならないと必死に自分にいい聞かせながら、どうすべきか一生懸命に考えて、やっと〝そうだ、みんなに一刻も早くこの悲しい事実を知らせなければならない〟と思いつき、あちこち連絡して回りました。

そしてしばらく経って、万田の遺族みんなで一緒に丸山さん宅にかけつけたのですが、丸山さんはまるで眠ったように安らかにフトンに横たわっておられました。会長と呼べば、いまにも返事してくれそうな姿で……。でも丸山さん貴男はついに永遠に帰らぬ人となってしまわれたのです。

丸山さん、貴男は沢山の遺族、また家族の方を残して、どうしてあんなに突然亡くなってしまわれたのでしょう。もう亡くなられてから一週間以上にもなるというのに、火葬場まで行ってお骨まで拾ってきたのに、私にはまだどうしても本当に丸山会長の死が信じられないのです。

いまにもいつもの調子で元気よくオートバイに乗って、気軽に連絡に立寄られるような気がしてなりません。丸山さんは、ただ主人が亡くなって、遺族になってからの知り合いではなく、丸山さんと主人はもう十何年間も一緒の部内で同じ仕事をやってきた仲だったし、会長も主人も本当にお酒の好きな人でした。

私が遺族となってからも、未熟ながら三年間ともに遺族会の役員として、常に行動をともにして参りましたが、あるときは叱られ、またあるときは父親のように甘えあるときはムキになって反ぱつして、めったに怒らなかった丸山会長をひどく怒らせたこともありました。

いまこの紙上に三年間の思い出を書くのは、あまりに長すぎますので省略したいと思いますが、ほとんど辛く苦しい思い出ばかりです。その一つ一つが脳裏に深く焼きついてはなれません。

三十九年八月の本社座り込みのこと、東京上京のこと、昨年八月の三井鉱山が不起訴になったときの抗議行動等々、溝口さん共々常にみんなの先頭に立って闘ってこられました。でも私たちは、いま一番大切な会長を失ったからといって、いつまでもその悲しみに負けていてはならないと思うのです。

亡き会長もCO特別立法制定を目前に控え、これからさらに重大な時期を迎えるに当って、その心痛も激しいものがあったと思うのです。去年の二月、北岡さんを失い、いままた丸山会長を失ったことは、実に悲しいことですが、この原因はやはり誰が何といおうと三年半前のあのいまわしい三川鉱の大爆発事故を起した三井鉱山に責任があると思うのです。

私たちは生命ある限り、丸山会長の遺志を受けつぎ、三井鉱山の責任追及を徹底的につづけ、闘いを進めて行く決意です。

丸山会長、本当に永い間大変ご苦労様でございました。いままでの数々のわがままを、心よりおわび致します。安らかにお眠り下さい。ご冥福を心よりお祈り致します。丸山会長、永遠にさようなら。

五月二十五日夜

五・二四スト

宮浦　平田光男

二十三日午後十時三十分
国鉄駅前に仲間達と集結
全員がホッパースタイル
マイクの指令で
セイセイと部署につく

昭和三十五年三月二十九日
久保清さんが
会社の手先
暴力団に殺されてから
俺は毎日
ホッパーのピケットラインと
ホッパー本部との伝令を
至命として
かがさなかった
その事が今瞬間脳裏をかすめた

炭鉱マンも
国鉄マンも
中小企業も
お百姓さんも
海で仂く人々も
連帯感を持って
闘った
それが今ここに集結した
俺ほどの執行部の
顔をみても
『大隊長ホッパー本部より伝令です』と
叫びたくなった

やまの汗

三川　小柳重義

仂らくやまの男の顔を見た
まるでぼく汁のような顔
どすぐろい豆炭のような顔！
その身体から　汗がふきでる
じんわりと　そして少しずつ
その汗が
闇の中できらりと光り
黒く大きく　しずくする——
するとこんどは　その汗がころび
油の上をころげるように
ころ　ころ　ころげだし
ついには車道に落ちた……
が
無心に仂らく　やまの男!!

S四二・五・二六

「家族ぐるみ」のソフトボール大会

三川　小浜南地域分会

地方選も終り、春闘への意志統一のために、五月二十一日（日）日本晴れとまでいかぬ空の下で、白球を追いながら、組合員・主婦も含めて社宅広場を利用してのレクレーションだ。

チーム編成も終り、十時に試合開始、各チームとも老若男女入り乱れての好ゲームに観衆も声援しきり、新労の人たちもこの楽しそうな行事に笑いを浮べて見物、盛況の中に午後一時ごろ終了、春闘への決意も固く全員で乾杯して解散した。

期待される妻の像

「妻をめとらばしまり屋で／金すくなくて野菜買い／バスに乗らずに自転車で／六分を使い四分のこす」——これは妻の像の一端です。制限スピード・オーバーのロケットみたいにドンドン物価が上がれば、こんなことでもいいたいです。上がるわ上がるわ、米、牛乳、酒、健康保険、バス代。上がらないのはただ一の、仂く者の給料だけ。こんな政治をどうかしましょう。そうせんと「期待される妻の像」は栄養失調の妻となりかねない。がんばりましょう。（住宅公団労組福岡支部機関誌から）【KNA】

太べ一言

新港　黒田昭子　21

内職はきつくてたまらんが……

主人は申し分ない

こんなときもあなたの人間的な変化をしみじみ感じさせられます

私が内職に行くようになって、あなたが朝のフトンの片付けだけはきちんとしてくれるようになりました。まだごはんをたくまでにはいきませんが、上の子が食事をしてくれるので、あなたも私も安心です。

分裂がにくい

毎日の内職で体がとてもきついときは、家までの道が遠く感じます。どうしてこんなにつらい目にあわねばならんのか、ほんとに組合の分裂がにくい、と思います。

しかし、子どもたちの幸せをねがい一生懸命活動しているあなたは申しぶんない主人です。

私とあなたの苦しみも、子どもたちの不自由も、きっと、必ず美しい未来で応えられることだろうと思います。

一言注文というなら、酒ずきのあなたが、のんだ翌朝はなかなか起きづらいということくらいです

私たちは貧乏はしても長生きしつづけること、それが一番大切なことです。二人とも、子どもたちも体に気をつけていつまでも……

足がはれる

私が内職にでるようになってもう二年になります。

カジ工のあなたは、三池労組員であるばかりで、満勤しても二万円あるかなし、五月の金受けは地方選挙もあって一万六千円という低賃金では、中学一年と小学校四年の娘たちをふくめ親子四人の生活があやぶまれるので、私が内職にでました。

一日中ミシンをふむ私は足がはれることもあります。夕方五時半に家に帰って食事の用意をすればもうグッタリとつかれて子どもたちの勉強をみてやるヒマもありません。

あなたも職場の組合運動で月のうち半分は帰りがおそいし、子どもたちの世話を十分できないのが可愛そうです。

気は短いが

あなたが今年から職場の分会長になったとき、生来の気短かさからそんな大役ができるかと思いましたが、自分の気持をおさえ、おさえてやっているのがよくわかります。

さすがに家に帰ると、玄関口をはいるなり、今日はどうだった、だれが何といったなど、私にいろいろとしゃべってくれます。